【連載タイトル】「ファミリーレスの老後を生きる人々」

【第７章タイトル】
『親と離れることの是非』

【第２回タイトル】
『ゴミの山から骨壷が２つ』

２０２２年夏。東京都江東区の路上にうずくまっていた当時 85 歳の男性・蒲田和男さん（仮名）が救急搬送された。買い物に出たが、熱中症のために意識を失ってしまった。即入院となったが、手元に保険証などの書類がない。病院所属のケースワーカーが名前と住所を行政に照会した。幸い無保険者ではないようだが、自宅の様子を見に行く人員を確保することができない。

行政からの依頼で、ＬＭＮが動いた。援助が必要な高齢者の身元保証や見守りなど、家族代行サービスを展開する一般社団法人だ。

担当した小山田雅史（54）は団体がスタートした２０１６年当時から籍を置くベテランだ。

「蒲田さんの自宅は小さな一戸建てなんですが、いわゆるゴミ屋敷でした。地域との繋がりも薄く、地元の民生委員も連絡を取れない状態だった。また、蒲田さんは初期の認知症を患っていたこともあり、江東区の担当者がＬＭＮを名指したようです」

ゴミ屋敷を片付ける業者は多いが、住民のその後の生活を見守ることはできない。ＬＭＮであれば、退院後の施設への入居や見守りなど、ワンストップで対応することができる。

「いつもなら、一気にごみ袋に詰めて廃棄物処分するところですが、蒲田さんのケースでは、保険証や通帳、印鑑などの貴重品探索も必要だったため、数人のスタッフで数回に分けて丁寧に処理しました」（小山田氏）

一見すると普通の家だが、入ると信じられない光景が広がっていた。ゴミが山のように積み上げられており、足の踏み場もない。カビの浮き出た壁や天井には、夏の暑さで腐敗したものの匂いが染み込んでいるようだった。

行政からの情報では、蒲田さんは一人暮らし、奥さんは数年前に亡くなったとのことだった。

ゴミの山を上から崩していく作業が始まった。

「居間の戸棚から保険証や通帳は出てきたのですが、まだ安心できません。他にも現金や貴重品があれば、蒲田さんにお戻ししないといけませんからね」（小山田氏）

ゴミの山が半分くらいの嵩になった頃、若いスタッフが声を上げた。

見るとアップライトピアノの上に２つの骨壷が並んでいたのだった。

「ずっと棚だと思っていたのですが、積もった荷物をどかしてみると、ピアノでした。多分娘さんが弾いていたのでしょう。“子供のバイエル”といった教則本も出てきました」

ゴミの山はまるで地層のように積み重なっていた。そこに家族の歴史を読み取ることができる。

ピアノの上の骨壷は若くして亡くなった蒲田氏の娘と、数年前になくなった妻のものだった。

「掘れば掘るほど、時間が遡っていきます。娘さんはどうやら二十歳くらいで亡くなったようでした」＝つづく